

26P-pm169

1年生「薬学概論」PBL テュートリアルでのプロダクト発表に対する評価
○足立 哲夫¹, 寺町 ひとみ¹, 原 宏和¹, 白井 茂之¹, 神谷 哲朗¹, 葛谷 有美¹,
土屋 照雄¹, 平野 和行¹, 永井 博弐¹(¹岐阜薬大)

【目的】学生の問題発見・解決能力の向上を目指し、薬学教育において PBL テュートリアルが広く活用されている。岐阜薬科大学では、1年生前期科目「薬学概論」の一環として、医療現場で発生するような事例を課題とした「薬を使う薬学」PBL テュートリアルを導入している。今回、グループ学習後のプロダクト発表に対する評価法として customer satisfaction (CS) 分析の有用性を検証した。

【方法】1年生 119 名を 12 グループに分け、1 日目には 6 課題の中から 1 課題を割り当てグループ討議およびプロダクト作成を行った。2 日目にはプロダクトを PowerPoint にて発表した(発表 8 分、質疑応答 3 分)。学生は他グループの発表に対し「調査の深度」、「スライドの見やすさ」、「話し方」、「質問に対する回答」、「発表者の理解度」、「(総合評価)発表内容の理解のしやすさ」という 6 項目について 5 段階評価を行った。教員も同じ様式で各発表を評価した。次いで評価結果についての CS 分析を行った。

【結果・考察】12 グループ全体では、プロダクト発表に対する総合評価である「発表内容の理解のしやすさ」を改善するためには、聞き手として教員並びに他グループ学生のいずれの評価からも「話し方」という基本的な発表能力の学習の必要性が抽出できた。次に個々のグループ発表における問題点を抽出するために、一般的によく用いられている 5 段階評価の平均値で表す方法と CS 分析法を比較した結果、両方法で抽出できた問題点(改善を要する項目)が一致していたのは 12 グループ中 4 グループのみであり、評価分析法が異なると抽出される問題点が違ってくることが明らかとなった。